



宮農情報

第32号 平成27年2月5日

「あまおう」2月の管理

南筑後普及指導センター

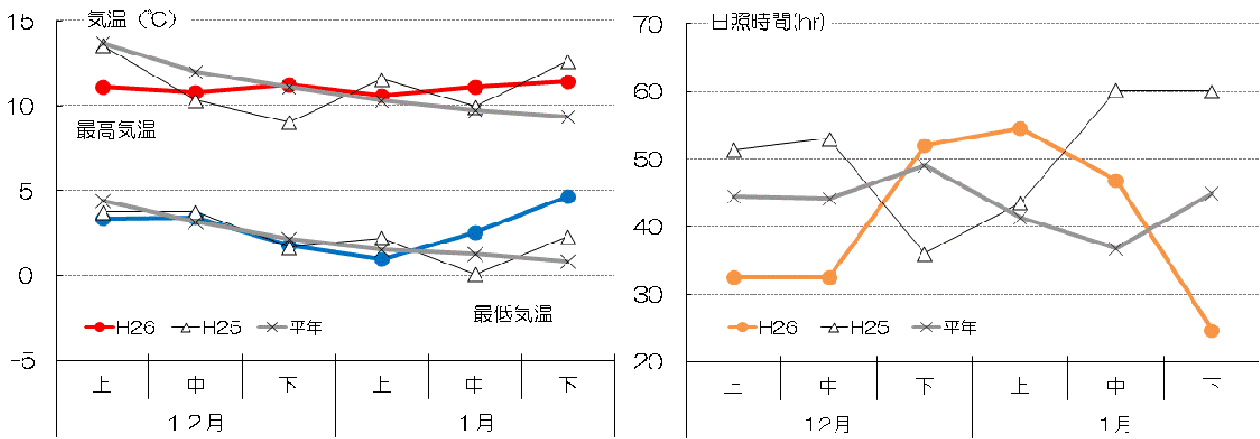
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t以上を目指しましょう

現在の生育状況は2番果房の収穫中で、早期作型で2～3果収穫、普通作型で頂果～2果収穫となっています。3番果房は、早期作型で出蕾～開花、普通作型で出蕾し始めており、2番と3番の果房間葉数は3枚～5枚といった状況です。2番、3番と連続した出蕾で着果負担がかかっており、心葉が小さくなっているほ場が見受けられますので、草勢を維持させる管理に努めて下さい。また、2月中旬以降は日照量が多く、寒さも徐々に緩むため、草勢が急に変化する場合があります。常に生育を観察し、株が急激に立ち上がらないように注意して下さい。

病害虫では、ハダニ類の発生が多くなっており、うどんこ病や灰色かび病も散見されます。気温が高くなると害虫も増えやすくなります。発生が拡大してからの防除では効果が低いので、発生前か小発生のうちに防除を徹底して下さい。

〈 最高・最低気温と日照時間(アメダス久留米より) 〉



《温度管理》

- 3番果房が出蕾するまでは、生育促進のため高めの温度管理とする。
- 3番果房の開花後は、果実品質向上のためやや低めの温度管理とする。
- 曇雨天日が連続する場合は、換気を重視し、午後は低めの温度管理を行う。
- 「灰色かび病」対策のため、日中は換気や循環扇により湿度を下げる。

| | 3番果房 開花前 | 3番果房 開花後 |
|----|-------------|-------------|
| 昼間 | 24～28℃ | 20～24℃ |
| 夜間 | 5～7℃ | 5℃ |

《かん水・肥培管理》

- かん水は、朝の葉水状況を確認しながら少量で回数を多く行う（pF値1.7前後で管理）。
- かん水量は、出荷量の増加や温度上昇に合わせて徐々に増やす。
- 水分不足は、果実肥大不足や、乾燥によるダニ類の多発要因となりやすいので注意する。
- 液肥は、1か月当たり窒素成分で2kg/10aを、3回以上に分けて施用する。
- 毎年、3月以降に先青果が発生しやすい場合は、液肥の施用を控える。
- 3番果房の出蕾が遅れている場合は、液肥施用による急激な立ち上がりが懸念されるので施用を控える。

《電照》

- 電照時間は、心葉が伸び始めたら徐々に短くする。
- 電照の効果は、株疲れや着果負担、天候により差があるので、常に心葉の展開状況を観察して時間を調整する。
- 3番果房の出蕾初期には、点灯時間をやや長く設定して早期出蕾を促す。
- 炭酸ガスを施用していて草勢が旺盛になることが予想される場合も、炭酸ガスの施用は継続し、電照時間などを調整する。

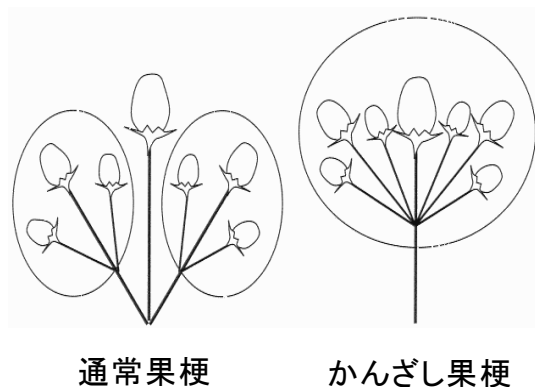
《摘果と株の整理》

- 収穫終了した果梗は、早めに除去する。
- 2番果房以降の摘果は、次果房の出蕾を確認した後、連続的に収穫ができるように摘果数を調整して行う。
- 3番果房が連続している場合は、着果負担の軽減のために強めの摘果を行う。
- 下葉は、枯葉や黄化した葉のみを除去する。

【1枝当たりの着果数目安】

| |
|---------------|
| 通常果梗：3～5果/枝 |
| かんざし果梗：6～8果/枝 |

※ 果房の状況に応じて調整する



(裏面につづく)

《果実品質低下防止対策》

- 高温期には収穫日の間隔を短縮し、収穫時の着色基準を遵守する。
- 草勢維持と収穫・調製作業の効率化のため、早めに摘果を行い小果の発生を未然に防ぐ。
- 急激な株の立ち上がりは食味低下の原因となるため、電照・温度管理等で適正草勢を保つ。
- 収穫した果実は、収穫箱内での積み重ねを避け、収穫後は速やかに低温の場所へ移す。
- 果実付近の通風が悪くなる場合は、病害や果実への「かび」の発生が懸念されるため、葉除け等を行い果実付近の通風を確保する。

《病害虫防除》

(1) ハダニ類

- ナミハダニは薬剤抵抗性が最も発達しやすい害虫のため、同じ系統の薬剤を連用しない。
- 下葉の除去後、葉裏に薬液がかかるように丁寧に防除する。
- ハダニの多発した株は、特に強めに葉かぎをした後に防除を行う。
- 葉かきしたあとの残渣は、ハウス内に放置しない。
- 気門封鎖型薬剤の卵に対する効果はほとんど無いため、気門封鎖型薬剤は複数回（2～3回）散布を行う。

(2) スリップス類

- 年内にハウス内で産卵していた場合、2月頃より活動し始める。
- 発生が確認された場合、すぐに防除する。
- ハウスの換気時間が長くなると、外部から飛び込む可能性が増加するため、特にサイド側や妻面付近の株に注意する。

(3) うどんこ病

- 3月以降の多発期に向けて、早期発見と予防防除が重要である。
- 電気加熱式くん煙器や、定期的な薬剤散布による予防防除に努める。

(4) 灰色かび病

- 曇雨天の前など発生を想定し、予防的な薬剤散布を行う。
- 発病後は、早急に被害果実を取り除き薬剤による防除を行う。
- 特に、窒素過多で徒長気味の株では発生しやすいので注意する。

《親株管理》

- 定植時の葉は、炭そ病の感染源になる可能性が高い。炭そ病菌は、15℃以上になると胞子が発芽するので、感染源となる古葉は2月上旬までに除去する。
- 心葉が動き出す前の2月上中旬頃から、炭そ病の予防防除を開始する。
- 病害では基本的には炭そ病の防除が中心となるが、うどんこ病も念頭に置いた防除を実施する。

農薬の登録使用基準を遵守しましょう！